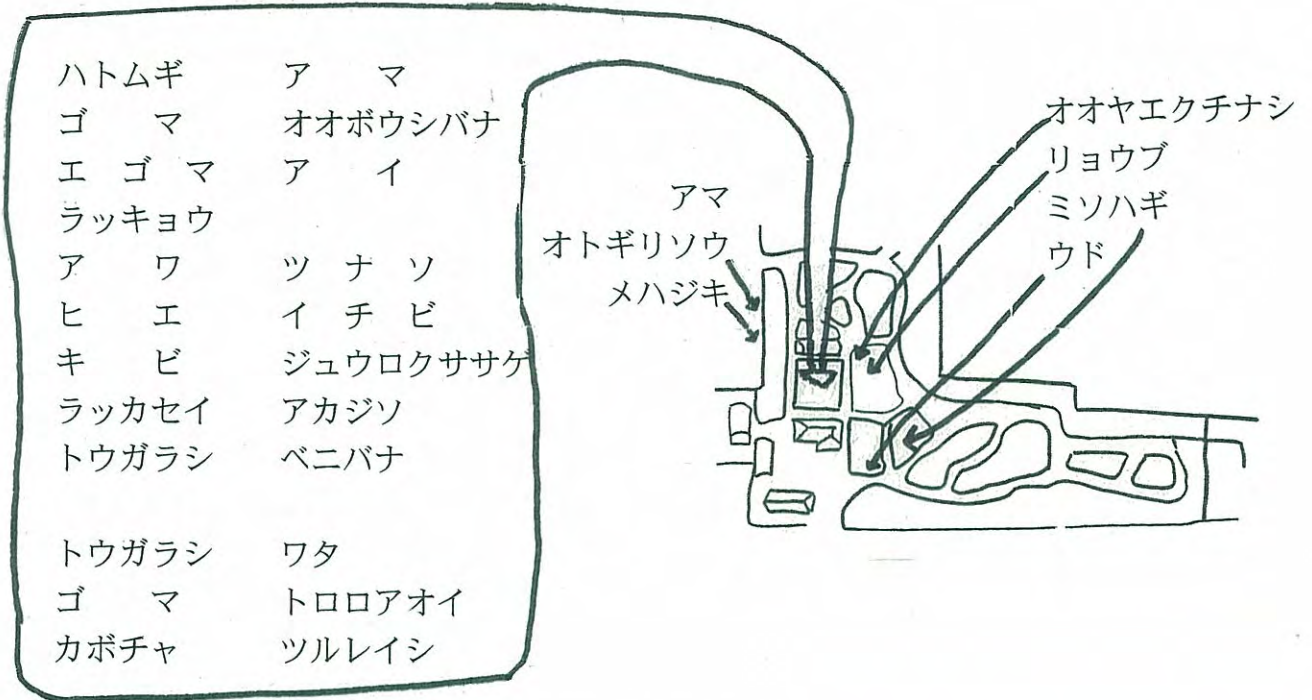


歴博 暮らしの植物苑だより

第92回 暮らしの植物苑観察会 7月22日(土) 13:30~ 暮らしの植物苑
『植物をめぐる禁忌』 篠原 徹 本館民俗研究系
第9回 日本の植物文化を語る 8月26日(土) 13:30~ 本館講堂入場無料
『近世の園芸文化—その仕掛け人と作り手—』 小笠原亮 (江戸園芸研究家)

畑栽培作物 その1



①ウド (ウコギ科タラノキ属)

夏緑の多年草。枝が大きく広がる性質があり、畑でひととき目立っています。花火のような散形花序をつけ、多くの虫たちがやってきています。苑内のウドはお店で売っている物と様相がちがいます、それは農家の人々が食用にする白い茎を得るために、土を盛ったり、むろで光を遮断したりして軟化させているからです。食用のほか中国では、根茎を当帰と呼び偏頭痛の薬として用いるそうです。



②リョウブ (リョウブ科リョウブ属)

日当たりの良い山地に生える落葉小高木。総状花序に多数のウメ花状の、白い花をたくさんつけます。春に若芽を摘み、あく抜きをして食用にします。材は硬いので細工物に使われます。



③オトギリソウ (オトギリソウ科オトギリソウ属)
山野に生える多年草で、枝先に小さい黄色の集散花序をつけます。全体にタンニンを多く含ため、紫外線を強く吸収する色素を持ちます。牛が多量に食べて、日光にあたると皮膚炎を起こして脱毛したりするそうです。民間薬では搾汁を打撲に、また湿布薬として神経痛・痛風などに用いたりします。



④メハジキ (シソ科メハジキ属)
山野の日当たりのよい道端に生える越年草。茎は四角形で直立し、上部の葉腋に淡紅色の花をつけています。種子は用いないですが、乾燥した全草を煎じて、手足の冷え、産後の鎮静などに用います。母の益になるというので、益齒葉草(やくも草)という名があります。



⑥ミソハギ (ミソハギ科ミソハギ属)
野原や山の裾野の湿地に生える多年草。茎は直立し上部で大きく分枝します。盂蘭盆(8月15日頃)に仏壇やお墓に墓花として供えます。所によりミソギ、ボンバナ、ボングサなどと呼ばれています。花の終わりに全草を乾燥させ、下痢止めに用います。

⑤アマ (アマ科アマ属)
中央アジアからサウジアラビア原産の1年草。茎からは繊維のリンネル(リンネ)をとり、高級織物の原料になります。種子からは、かゆみをとる成分が含まれる油(亜麻仁油)をとります。繊維植物としてだけでなく、観賞用にも栽培されています。繊維用には枝分かれしない品種を、油用には多くの枝をだし種子も大型の品種を植えます。



⑦オオヤエクチナシ (アカネ科クチナシ属)
暖地に生える常緑低木で、苑内にはクチナシとオオヤエクチナシがあります。花が大きく八重咲きの品種で、庭木や切花に栽培されています。花を乾燥してお茶にしたり、果実を黄色染料として、食用や染め物に用いたりします。お正月料理のキントンには必要なものです。果実の形を、将棋盤や囲碁盤の足に摸しています。

